

間主体態の論理

『ASSB』第2巻5号(1995年2月)所収

間主体態とは間主体性とか間主観性とか訳されている。フッサールが提起して以降、現象学の主要テーマの一つである。これは個としての主体と主体との間の関係をどう捉えるか、という問題であり、現象学は今日に至るまでこの難問を解決できていない。

ところで脱物象化をめざした協同主体の形成を解明しようとする際、主体と主体との間の関係を捉える方法論を確立しておくことが必要となる。現象学の成果がたよりにならないとすればこの課題を解決するために役立つ理論が他にあるのだろうか。

このような問題意識で、とりあえずマルクスの関係論と反照の論理、及び形態規定の論理を再読することから始めよう。

第一章. 関係、反照、形態規定

(1) 関係とは何か

「諸関係というものは、総じて、それらが、たがいに関係しあっている諸主体から区別されて、確定されなければならないとされるばあいには、ただ思考されることができるだけからだ。」(『資本論草稿集』4巻116頁)

マルクスは『経済学批判要綱』として戦後出版された研究ノートで、A、B二つの商品の交換関係を考察し、この関係で等しいものは、AでもBでもない第三者であり、この第三者はある一つの間関係を表現しているから頭の中の表象として存在している、と述べたあと、このように、関係それ自体は思考されることができるだけだ、と述べた。これはおそらく、関係として表現されるものが、抽象的なものであり、人間の感性では捉えられない超感覚的なものであるからなのだろう。

関係をたがいに関係しあっている諸主体をも含めて理解しようとするれば、それは一つの形態として存在している。従って、二つの商品が関係している、という経済的な関係の内容は、この経済的な形態を分析するところから導き出されねばならない。形態はおのずから内容を決めている。その経済的な形態のうち形態規定を発見すればよい。ところがそうしようとするれば、諸主体は関係の項となり、両極となってしまふ。ここではヘーゲルが磁力について述べている両極性の論理が働く。

「両極は、一本の實在的な線の感性的に現存する両端である。しかしこれらの極は、極としては、感性的な、力学的な實在性を持たず、観念的な實在性を持つ。これらの極は分離することが全く不可能である。」(ヘーゲル『エンチクロペディー』河出書房新社、253頁)

先にマルクスが、関係を両極から区別し、それ自体を確定しようとするれば、それは単に思考されるだけのものにしかならない、と述べていた。そこで、関係する諸主体をも含め、関係を一つの形態として想定し、形態規定を発見しようとするれば、今度はヘーゲルが、両極は感性的な實在性を持たない、と言う。

外的素材はなくとも論理を展開していく観念論とは違い、感覚的に確かめうる外的素材を分析しようとする唯物論にとっての困難が現れる。二つの商品の経済的な関係について、関係そのものを分析しようとするれば抽象的となり、ついで両極を分析しようとするればそこには観念的な實在性しかない、というのである。

(2) 反照の論理

では関係を把握するにはどうすればよいのか。関係の論理学はありうるのか。関係の論理学は反照(リフレクション、反省、反射とも訳される)の論理学であり、マルクスが明らかにした形態規定はヘーゲルの反照論を完成させたものであって、これこそが弁証法の核心

をなしている。このことを明らかにしよう。

ヘーゲルは相互に独立したもの同士の関係における反照の論理を次のように展開している。

「両者がそれぞれ自分とは他者ではないという形で向自的にあるのだから、両者はそれぞれ他者の中で照り返しており、他者があるかぎりにおいてのみあるのである。したがって本質の区別は対立規定であり、これによれば、区別されたもの（両者）は決して他者一般を持つのではなくて、自分の他者を自分に対して持つのである。両者はそれぞれ自分の独自の規定を他者への自分の関係の中のみ持つ、そしてそれが他者へと反照させられているときじつはただ自己へと反照しているにすぎない。そして、その他者もまたこれと同じことをしているのである。このように、両者はそれぞれ、他者固有の他者なのである。」（『エンチクロペディー』131頁）

ヘーゲルの論理学の本質論では反照の論理が駆使されて、本質が何であるかを展開していく。反照の論理は本質の展開過程で様々であるが、論理としてとりだすならば、ここに示したものとなる。

ヘーゲルにとっては、論理学で対象となっているものは思考である。従ってそれは直接的には外的対象にとっての論理ではない。とはいえヘーゲル論理学の特徴は、それが思考を対象としつつも、その概念を客観化するものと捉えているところにあった。従って、伝統的な論理学とちがひ、対象の論理をもそのうちに組み込んでいた。だから、対象に則して反照の論理を展開しようとするとき、ヘーゲルの論理には弱点が現れる。それは形態の規定をどう捉えるか、ということである。

ヘーゲルにとって本質的なものは関係であると捉えられてはいても、それは思考と思考との関係であった。従ってその反照にもとづき、現象が生成され、一つの形式が出現したとしても、それは本質の形態でしかありえなかった。ところが思考とは異なり、外的素材が関係を結ぶと形態が二重化してしまう。外的素材は新たな形態によって形態規定され、本来の自然的質の他に新たな質を持ってしまう。ヘーゲルに欠けているものはこの形態規定の論理である。

(3) 形態規定の論理

商品A、例えばリンネルは使用価値である。これと商品B、例えば上着が関係させられ、1エレのリンネル＝1着の上着、という経済的關係が成立しているとしよう。

リンネルは使用価値としては上着と異なっている。リンネルとも上着とも異なる第三者がこの関係をとっているのだが、それはただ思考されることができるだけである。マルクスは社会の中で成立している抽象的人間労働がこの第三者であることを発見し、それを価値の実体と規定したが、それ自体は思考産物でしかなかった。

ところが、リンネルと上着を両極とする価値関係を考えると、両極が反照しあうことによって、先の思考産物が実在的なものに転化される。このときヘーゲルは両極が観念的な実在物になることを心配していた。マルクスが発見した形態規定の論理は、ヘーゲルの心配を杞憂とした。

「リンネル価値の上着での表現は、上着そのものに一つの新しい形態を刻印する。・・・上着はいまやまったくそのありのままの姿で、上着というその自然形態において、他の商品との直接的交換可能性の形態を、一つの交換の可能な使用価値の・あるいは等価値の・形態を持つ。」（『マルクス経済学レキシコン』11巻、27頁）

二つの商品がとりもつ関係を表している形態が、それぞれに新しい質を与えることが形態規定の特徴である。両極にそれぞれ新しい質が与えられる、ということは、従来の質が観念的な実在物に転化されることを意味している。この点でヘーゲルの心配は当たっていた。しかし、両極が新しい質の形態として形態規定されていることを知れば、両極は二重物になった、ということであり、感性的な実在物が、超感性的な質を形態規定によって新たに獲得

した、ということなのである。

反照の論理が形態規定の論理と結び付けられることによって始めて、外的素材同士の関係が解明しうる。双方を結びつけた例が、マルクスの商品論なのである。

「われわれはここで、価値形態の理解を妨げるすべての困難のかなめに立っているのである。商品の価値をその使用価値から区別すること、あるいは、使用価値を形成する労働を、単に人間的労働力の支出として商品価値で評価される限りでの同じ労働から区別することは、比較的たやすい。商品または労働を前の形態で考察するときには、あとの形態では考察しないし、あとの形態で考察するときには前の形態では考察しない。これらの抽象的な対立物はおのずからたがいに分かれるのであり、したがってまたたやすく見分けられうるのである。商品の商品に対する関係の中にだけ存在する価値形態の場合はそうではない。使用価値あるいは商品体は、ここでは一つの新しい役割を演じるのである。それは商品価値の、つまりそれ自身の反対物の現象形態となる。同様に、使用価値に含まれている具体的有用的労働が、それ自身の反対物に、すなわち、抽象的人間的労働の単なる実現形態となる。商品の対立的な規定は、ここでは、互いに分かれるのではなくて、互いに反照しあうのである。これは一見するといかにも奇異に思われるが、立ち入って考察すれば必然的なものであることがわかる。商品は、もともと一つの二重物、すなわち使用価値及び価値、有用的労働の生産物及び抽象的な労働凝固体である。それ故商品は、自分が商品なのだということを表すためには、その形態を二重にしなければならない。使用価値の形態は、商品は生まれながらにもっている。それは商品の自然形態である。価値形態は、商品が他の諸商品との交わりにおいて始めて獲得するものである。だが、商品の価値形態は、それ自身がまた対象的な形態でなければならない。諸商品の唯一の対象的な形態は、その使用形態、その自然形態である。ところで、一商品、例えばリンネルの自然形態はその価値形態の正反対物なのだが、それは、なにか他の自然形態を、他の一商品の自然形態を、自分の価値形態にしなければならない。それは、直接に自分自身にたいしてすることができないことを、直接に他の商品にたいして、したがってまた回り道をして自分自身にたいして、することができるのである。」(同、31～2頁)

商品の価値関係にあつては、等価商品の使用価値が形態規定を受けて、別の質である抽象的人間労働の現象形態となること、このマルクスの発見を理解できている人々が何人いるだろうか。

(4)鏡の比喻

マルクスは二商品の価値形態に形態規定の論理を発見し、主としてヘーゲルによって展開された未完の反照の論理を仕上げた。等価形態にある商品が、その自然的形態のまま、その反対物たる抽象的人間労働という社会的・一般的なもの現象形態になる、というこの論理を解明したところでマルクスは興味のある注をつけている。

「見ようによっては人間も商品と同じである。人間は鏡をもってこの世に生まれてくるのでもなければ、私は私である、というフィヒテ流の哲学者として生まれてくるのでもないから、人間は最初はまず他の人間の中に自分を映してみるのである。人間ペテロは、彼と同等なものとしての人間パウロに連関することによって、始めて人間としての自分自身に連関するのである。しかし、それとともに、またペテロにとっては、パウロの全体は、そのパウロ的な肉体のまま、人間という種族の現象形態として意義をもつのである。」(『資本論初版』、国民文庫、49頁)

ヘーゲルにこのことがわかっておれば、『精神現象学』の展開もずいぶん変わったものとなったであろう。もっともマルクスがここで用いている鏡の比喻についてはスミスが『道徳感情論』ですでに使っていた。

「もし、人間という被造物が、ある孤独な場所で、彼自身の種とのなんの交通もなしに成長して、成年に達することが可能であったとすれば、彼は、彼自身の顔の美醜について、考

えることができないであろう。これらすべては、彼が容易に見ることができず、彼が自然に注視することがなく、それらにたいして彼が目を向けることができるようにする鏡を与えられていない、諸対象なのである。彼を社会のなかにつれてこよう。そうすれば彼は、ただちに、彼が前に欠如していた鏡を与えられる。それは、彼がともに生活する人々の、顔つきとふるまいの中におかれるのであって、その顔つきとふるまいは常に、彼らがいつ彼の諸感情の中に入り込むか、いつ彼の諸感情を否認するかを、表示するのである。そして、ここにおいてのはじめて、彼自身の諸情念の適宜性と不適宜性、彼自身の精神の美醜を、眺めるのである。」（筑摩書房版、181～2頁）

スミスもマルクスも同じことを述べているが、スミスは文字通り鏡の比喩としてしか展開できていないのに、マルクスの場合、ガラスの鏡とは異なる人鏡の論理を解明している。そうだから、この論理は、ヘーゲルの『精神現象学』の承認の論理をのりこえるものとなったのである。

(5) 弁証法の核心

弁証法とは何か、と言うと、エンゲルスがまとめた三つの法則があげられる。

「量から質への転化、またその逆の転化の法則、対立物の相互浸透の法則、否定の否定の法則。」（『自然の弁証法』1、国民文庫版、65頁）

ここには反照の論理も形態規定の論理もなく、従って関係の論理がない。しかし、関係の論理こそ、いまだに哲学者たちがつかみあぐねている当のものであり、ここにこそ弁証法の核心がある。

自然物が関係の項となることによって社会関係に入るとき、形態規定によって自然物が二重の質をもつ。問題は形態規定によって与えられる新たな質が何であるかを発見することであり、その抽象的なものがその関係の両極の反照によって抽象されていることをつきとめることにある。

そうだとすれば、両極の反照による抽象化、つまりは総合による抽象が弁証法の核心だ、ということにならないだろうか。このように捉えることによって、思考と存在とをつなぐかけ橋として弁証法を位置づけることが可能となるのである。